古代文藝における愛

——その本質と展開——

古代文藝における愛

――その本質と展開――

青木生子

（愛する古代文藝）

昭和二十九年四月十日　初版印刷
昭和二十九年四月十五日　初版發行

定價參百圓

著作者　青木生子

發行者　八坂淺太郎
東京　神田　駿河臺

印刷者　中内佐光
東京　千代田　飯田町

發行所　東京都千代田區神田駿河臺
振替東京五三九〇九番
電話神田（一〇七五）（〇六八二）（〇七三二）
株式會社　弘文堂

（本製仕德・印刷瞬）

（落丁乱丁等に就ては責任を持ちます）

序說

本書の「古代文藝における愛」といふ標題を、もう少し詳しく說明するなら、これは古代文藝における戀愛をその本質と展開のもとに、いささか問題史的に取扱つた研究の意味である。愛といつてもここでは全く戀愛を主題にしてゐることを先づ規定しておかねばならない。

いつたい、文藝における愛とは何であるか。これは常識的にも學問的にも種々の見解があると思ふが、まことに厖大なここで論じつくせるやうな問題ではない。愛の發動はその對象物の如何により、戀愛、肉親愛、友愛、隣人愛、人類愛等の人間間に生起する愛から、更にそれ以外の樣々の、たとへば自然愛、あるひは宗教的形而上學的道德的の愛など、その種類は無限に豐富である。かうしてみれば有生無生のあらゆるものが卽ち愛の對象である。人間の生に廣く根ざす愛といふものの把捉自體が、極めて困難な哲學的認識を要するものである。

文藝がこのやうなありとあらゆる愛と關聯してゐることは勿論いふまでもないが、中でもとくに戀愛が文藝と最も密接な關係にあることは何人も認める事實であらう。戀愛が古今東西を通じて文藝の有力な發生動力となり、あるひは作品の最も多くの素材內容とされてゐることはここに改めていふまでもない。文藝と戀愛がこのやうに奇しき合體をなしてゐるのは如何なる理由に基づくのであらうか。異性を對象とする戀愛は、他の愛に比して本來人間の精神的面と感覺的面が渾一的に最も强く生命的體驗として發動するものであるから、これが、藝術としての感覺的具象性を要請する

文藝の中に最も強く發現されうるのも當然であるといへる。つまり文藝といふ藝術作品の本質的な在り方と、戀愛といふ人間の生命活動との間に、深い必然的關聯があるからなのだと思ふ。しかしこれも、嚴密にさまざまの角度より考へれば、さう簡單に解明できるものでもなく、まことに大きな哲學上、美學上の問題であらう。常に具體的な文藝作品を扱ふ者にとつても、この點はなほ終局の重要な課題になるのである。が、ここではこの一般的原理論が正面の問題にされようとしてゐるのでないことは申すまでもない。

そこでこの書において考へようとすることは、卽ち文藝一般ではなく、標題に示すやうにあくまで日本の古代文藝についてである。日本文藝全體でなく、古代にこれを區切つたのは、私の研究範圍がそこまで及ばなかつたこともあるが、しかし一方とくに古代を取上げたことはそれなりの意義があると思ふからである。おほよそに古代と總稱しうる平安朝末期までの文藝は、その後の中世に比べるとき、著しく人間中心的であることは論をまたない。近世の文藝は再びこの人間を復興したともみられるが、それはおのづと異なる樣相を呈した發現である。古代文藝の本質に眼をそそぐとき、そこに扱はれてゐるものが、すぐれて人間の根源的な愛情であることを我々は確認することができる。さうしてこの愛情は、とりもなほさず、最も人間の生の躍動の中から生れるところの戀愛なのである。もつとも古事記や萬葉集あるひは伊勢物語の中には、君主に對する忠誠の情や、また臣下によせる慈愛の情もあり、親子兄弟間の肉親愛、あるひは朋友愛等も少からず素材にされてゐる。それに、自然によせる愛は平安朝に入り古今集や源氏物語の中には著しく、そこには一方宗教に對する愛も芽生えてきてゐる。更に平安末期の文藝には宗教への憧れとともに親子の恩愛の情も

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

また輕視できない。だが、中世の文藝が自然や宗教によせる深い愛に本質的契機をもつてゐるのとは、およそ比較にならないのである。古代におけるこれらの愛は戀愛に匹敵するほどの重みを遂にもたず、それらは中心の戀愛のめぐりに存在し、戀愛に僅か變調をそへるものでしかない。實に古代文藝の中樞である戀愛は、記紀の原初的な情緒の表出から源氏物語の戀愛世界に至るまでにおいて殆んどゆきつくところまでゆき、やがて崩壞を遂げるといふ一つの發展過程を全うしてゐるものの如くである。

日本の古代文藝は疑ひもなく戀愛の書なのである。これまでにも古代文藝の研究にはそれぞれに應じて屢々戀愛に論及してゐるのもあるが、古代文藝全般にわたつて戀愛をこのやうな意圖と俯瞰のもとに一貫して究明してみるのも、いささか意義があるのではないかと思つた次第である。

そもそも戀愛は抒情的性格と結びつきやすく、日本の古代文藝が戀愛の文藝であり抒情の文藝であることは、外國の文藝と比較してみるとき、更にその特質が明かになるであらう。西歐では眞に戀愛の抒情詩の生まれたのは、キリスト教の精神主義と戀愛が結びついた中世も近代に近い頃であるさうである。それ以前にももちろん古代ギリシャには抒情詩もあつたが、他の敍事詩や悲劇の方がはるかに優勢で、古代文藝の中心に位するものでなかつた。愛の感情は知的な深遠さや意志的な崇高さとともに、人間精神の優美な面を形成してゐるものである。この愛の優美な精神が我が古代では、萬葉集のやうな最も純粹な戀愛の抒情詩として歌はれ、あるひは源氏物語における微細を極めた戀愛心理描寫として物語られてゐることは、たしかに一つの驚異といはねばならないであらう。

このやうな意味で、文藝における戀愛の課題と古代文藝の探求とは最も密接に結びつくものと思

ふのである。さうして私は前者の問題を後者の具體的研究の中に摸索し織込むといふ方法をとらうと思ふ。從つてこの書はやはりどこまでも古代文藝に關する一考察なのである。はじめに古代文藝の展望をこのやうな觀點と方法で試みる。戀愛は、作品に形象化される場合、抒情文藝(詩歌)と敍事文藝(物語)では、自らその發現の樣相を異にする。卽ち戀愛の精神や感情面の發露してゐる抒情詩と、戀愛のむしろ感覺的智的把捉のなされてゐる物語とに大きく二分してそれぞれの發展を跡づけてみる。それから更に、古代の代表的作品であると同時に戀愛の主題の重要性をもつ作品——これは全く一致する——として、古事記、萬葉集、古今集、伊勢物語、源氏物語、狹衣物語を取りあげ別途にやや詳細な考察を施さうと思ふ。これらの作品研究は題目にもおのづと現はれるやうに、同じ戀愛を研究主題としてもその扱ひ方が、それぞれの作品の文藝的性格乃至ジャンルに應じて角度を多少異にする。これは前に述べたやうな個々の作品の現象面に最も關心を拂はうとする態度のためである。その具體的理由については個々の研究の中で明示しておくつもりである。

私の意圖並びに研究態度はほぼ以上述べたごとくで、更に蛇足を加へる必要もないと思ふが、本書の意圖はどこまでも古代文藝における戀愛の意義を研究する點にあつて、作品を材料として當時の社會の戀愛なり戀愛觀そのものをみようとするものではないことを——但しその間の交渉は當然行はれなければならないが——ここにお斷りしておきたい。たとへば自然感情のやうなものは、文藝に固有な觀照的要素をもつてゐるので、比較的その混亂が生じがたいのであるが、戀愛は文藝と密接な關係にありながら、それ自體は極めて廣汎な人間や人生の諸問題に連なつてゐるので、それ

だけややもすると文藝の領域をこえた思想史や倫理學やその他何かの學の問題に迷ひこみやすい。また戀愛は、他のすべてもさうではあるが人間關係としてとくに社會の內において生起するものであるために、社會の變遷にともなつてこれもまた變遷を免れない。それがまた當然文藝における戀愛の上にも反映してゐることはいふまでもないが、安易にその歷史的動因の探索に手をのばすと、文藝固有の姿をややもすれば見失ふ危險もある。戀愛の推移も文藝自體の中で捉へられる可能性が見出されるべきであらう。要するに文藝においては、戀愛がどこまでも一つの美的形象としてあらはれ、廣義の美的情調を發してゐる姿において把捉されなければならないと思ふ。

更にもう一つ附け加へておきたいことは、ここで用ゐてゐる戀愛といふ言葉についてである。古代文藝の中には、戀愛といふ文字がそのまま使はれてゐる例に一度も遭遇しない。のみならず、恐らく明治以前の古典の中にはこの語を見出すことは甚だ困難なのではないかと思ふ。戀愛といふ語は明治以後の西洋の近代思想の影響をうけた所產であるらしい。戀愛なる語が實際に使用されてゐなかつた我が國の古典には、嚴密な意味で現代の語感そのままの戀愛が存在しなかつたといふ言ひ方も或ひはできるかもしれない。現に、近代文藝を扱ふ人々からさういふ意見もたまたまきく。それは丁度、自我といふものが近代の所產で、それ以前には眞の自我がなかつたと說くのとやや類似した言ひ方でもあらう。自我の影響の上にたつたいはゆる近代的意味の戀愛の觀點からみるなら、前のやうなこともいへよう。ところがここではそのやうな立場でみようとするものでないことは旣に述べたとほりである。しかも廣く異性を對象とした愛を、その他の愛と區別していふとき、それはやはり通稱として戀愛なる語が一番妥當であるので、ここに用ゐたまでである。戀愛は時代的に

さまざまの變貌を呈してゐるのは當然であるが、また他方、人間の生そのものともいへる愛には、本質的に不變な面も儼存してゐる。古代文藝には或る意味で戀愛のこの不變的本質の面が最もよく具現されてゐるといふこともできるので、單なる便宜上のみならず、戀愛の語を用ゐる積極的理由も成り立つのである。

目次

序説……一
一　古代文藝の展開と戀愛……一
　一　抒情詩の發生と戀愛……一
　二　抒情詩の展開と戀愛……一〇
　三　物語の源流と戀愛……二五
　四　物語の展開と戀愛……三六
二　古事記における戀愛の意義……四八
　一　古事記の政治性と戀愛……四八
　二　戀愛の諸相……五七
　三　悲劇的説話……六四
三　萬葉集の戀愛感情……七一
　一　萬葉集における愛情の概觀……七一
　二　戀愛と鬪爭……八一
　三　愛の悲劇的感情……九三
　四　萬葉的愛の本質……一〇一

五　愛の消極的感情……一一〇
四　古今集の戀愛の世界……一二九
一　戀愛の情趣化……一二九
二　古今的愛の本質……一四〇
五　伊勢物語の戀愛の基調……一五一
一　伊勢物語の基本的情趣……一五一
二　ひたぶる心――悲劇的情熱……一五七
三　ながめ――物思ひ……一六〇
四　みやび――色好み……一六六
六　源氏物語の戀愛の問題……一七五
一　源氏物語の戀愛形態……一七五
二　光源氏の愛の綜合性……一七七
三　女性側の愛の課題……一八三
四　光源氏の愛の苦惱……一九一
五　女性側の愛の苦惱……二〇一
六　薫の愛の純一性……二〇七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

七　大君の戀愛觀……二二五
八　浮舟の戀愛否定……二二九
七　狹衣物語の戀愛の性格……二三二
一　狹衣物語の戀愛形態……二三二
二　狹衣大將の愛の分裂性……二三五
三　女性側の愛の性格……二四七
四　古代末期における愛……二五二
あとがき……二五八

一　古代文藝の展開と戀愛

一　抒情詩の發生と戀愛

一

記紀の歌謠は、古事記の成立からさして遡ること遠くない四・五世紀ころの所産といはれてゐるが、日本文藝の源泉として、その素材をみると、戰鬪と酒宴と戀愛が主なるものである。酒宴の歌は內容が戀愛に結びつくこと多く、戰鬪的な歌の中にも戀愛的要素は皆無ではない。凡そ古代の民謠と目されるこれらの歌謠が、戀愛を極めて多く素材にしてゐることは周知の事實である。といつて、今ここで、人間の本能的愛の中に文學の發生起源をみようなどとするものではない。ただともかく、このやうに多量を占める記紀の戀愛歌が、やがて萬葉のやうな最も純粹な抒情的戀愛歌に發展してゆく、文藝上の過程や意義を問題にしてゆきたいと思ふ。

まづ記紀の戀愛歌についてしばらく考察を試みてみよう。いかなる原始社會にあつても、生物的本能のままなる雜婚狀態は、今日の學者の假設的想像でしかない如く、全く愛情の精神的要素をともなはぬ人間男女の、本能的結合もやはり考へられないことであらう。天地初發の頃、伊邪那岐・伊邪那美神が結合の際交はしたといはれる「あなにやしえをとこを」「あなにやしえをとめを」の叫びとも歌とも會話ともいひかねるこの言葉にも、それ自身愛情の端的な表現がうかがはれるので

ある。また「八島國　妻求ぎかねて　遠々し　高志の國に」婚ひにいつた大國主命の行爲は、同血族の性交をさけるため、遠くに妻を求めにゆくやうになつた當時の半血緣婚の社會狀態を裏書きするものとみても、「賢し女を　有りと聞かして　麗し女を　有りと聞こして　さ婚ひに　在り立た」すところには、やはり愛情の憧憬性を否むわけにはいかない。しかもこの愛情にこたへるものは、「栲綱の　白き腕　抹雪の　弱る胸を　そ叩き　叩きまながり　眞玉手　玉手差し纏き　股長に寢は宿さむを」といふ本能的肉體的結合にあるのである。これらにこそ戀愛の靈肉一致の最も完璧な姿を見うるといふこともできよう。このやうにして我々の知りうる最も古代の作品の中にも我々は、古代人の戀愛の存在を認めるにやぶさかでない。それは凡そ人間である限りにおいて持ちうるやうないはば自然的生態としての戀愛であり、人間の生の原初的素朴な表現段階の記紀の民謠に、このやうな戀愛的分子の多いことは、當然の理といはなければならない。

しかし伊邪那岐・伊邪那美神の唱和は、自然生的な戀愛の刹那の表現で、これを文藝作品とみとめることが不可能であることもいふまでもない。また前述の大國主命と沼河比賣の唱和は、歌それ自身の內容からしても戀愛の當事者の作とはいかにしても看がたい。個人の戀愛ではなくして、集團の間で理解されるために戀愛の樣子がかく語られたものであらう。いづれにもこれらには、戀愛といふものが、人間の內面意識において構想される、いはゆる藝術化、作品化がいまだ充分行はれてゐないのである。或は「倭の　高佐士野を　七行く　孃子ども　誰をしまかむ」と歌ふ仲人の大久米命に對し「かつがつも　最先立てる　愛をしまかむ」と神武天皇が答へられる歌にしても、そこに全く戀愛に關する事柄が、生のままの實用的表現となつてゐるにすぎない。記紀の兩書にみえ

る歌垣の一連の歌などもその適例である。作者や歌の順次、及び内容の細部に相異はあるが、ともに美女を中心にした男性の闘争的葛藤がここには歌はれてゐるのである。「大君の　王の柴垣　八節結り　結り廻し　截れる柴垣　燒けむ柴垣」（古事記）や「臣の子の　八符の柴垣　下動み　地震が震り來ば　破れむ柴垣」（日本書紀）に明瞭なごとく、戀愛の闘争が實際、歌を以つて行はれた事實を知ると同時に、この一聯に屬してゐる「大魚よし　鮨衝く海人よ　其が荒れば　心戀しけむ　鮨衝く鮪」（古事紀）や又「琴頭に　來居る影媛　玉ならば　我が欲る玉の　鰒眞珠」「大君の　御帶の倭文繪　結び垂れ　誰やし人も　相思はなくに」（日本書紀）の歌における戀愛も、從つて自然的生態としての戀愛そのものとみられるのである。

このやうにして、たとへ短歌形式をもつ歌謠の中にも、戀愛はいまだ藝術意識の體驗を經ない自然自體の素材のままで存在してゐるものが甚だ多い。

八雲起つ　出雲八重垣　妻ごみに　八雲垣作る　その八重垣を

葦原の　繁こき小屋に　菅疊　彌清敷きて　朕が二人寢し

前者は戀愛の歡喜が、その感情を心内で構想することを經ず、素朴な自然的狀態のまま口をついて出たやうな叫びである。八重垣もこのやうな戀愛と併存してゐる自然的生の素材にすぎないのである。かくしてここの戀愛の性格は「あなにやしえをとこを」と何ら相異するところがない。右の第二首は第一首の戀愛情緒に對して戀愛行爲の敍述であるが、その戀愛が自然的生態そのものである點では兩者同じい。ここの「葦原の繁こき小屋」も「菅疊」も自然的存在と同一のものだし、「二人寢し」は全く自然行爲としての戀愛そのものにほかならないからである。このやうな戀愛の實際

行爲や求婚や鬪爭の戀愛歌、あるひは衝動的情緒の叫びのやうな戀愛歌においては、戀愛が、いまだ藝術の眞の感情內容にまでなり得てゐないのである。

しかし記紀の歌謠の戀愛は、やがて短歌形式の發達とともに抒情詩の內容感情として、次第に歌はれるやうになつてゆく。

さねさし　相模の小野に　燒ゆる火の　火中に立ちて　問ひし君はも

道の後　古波陀嬢子は　爭はず　寢しくをしぞも　愛しみ思ふ

梯立ての　倉椅山を　嶮しみと　岩縣きかねて　吾が手取らすも

これらには未だ完全に抒情詩として燃燒しきらぬ、前揭の例歌に通ずる自然的生態の戀愛がうかがはれる。これと眞の藝術的感動との關聯、差異はしかし簡單明瞭ではないのである。が、次ぎの歌などになると、その戀愛は自然的生態でなく、作者の精神活動によつて創造された藝術美といふことができるであらう。

（一）　奧つ鳥　鴨著く島に　我が率寢し　妹は忘れじ　世の盡に

（二）　倭方に　西風吹き上げて　雲離れ　そき居りとも　吾忘れめや

（三）　我が夫子が　來べき夕なり　小竹が根の　蜘蛛の行ひ　今宵著しも

（一）の歌における「奧つ鳥　鴨著く島」は、「我が率寢し」といふ戀の單なる自然の場面、背景といふより、作者の中で一段と構想し、創造せられたものである。これは卽ち作者の、自然生態的戀愛から、一段昇華された藝術的な戀愛感情によつてなされたとみるべきである。この作の戀愛が自然生態的なそれでないことは、下句で回想の中にしみじみした憧憬をたちのぼらしてゐる點で明

瞭であらう。（二）の歌の序詞の中の、西風に吹きちぎれゆく白雲は、戀人と離別した戀愛心情によつてはじめて捉へられ、生かしめられた自然で、從つてまたその戀愛は逆にいへば、その自然によせられるやうな憧憬や悲傷や誠實の心情性に濾過された藝術美なのである。（三）の戀愛は、ここではひたすら相手を待つといふやはり憧憬性において、他の何らの夾雜物もなく純一に表現されてゐる。この歌ははじめより一筋に自分の思ひの中心が咏嘆され、下句の「蜘蛛の行ひ」は、上句の戀愛感情を一層しぼる役目をはたしてゐる。これらの歌の發想はどうみても、一人の人間の胸の奥から、しみじみ出てきた戀愛の心情である。その戀愛は完全な抒情詩における戀愛感情であることを認めねばならない。

これらの戀愛感情は、もはや記紀歌謠の中に素材として多く存在してゐる自然的な戀愛と、かなりはつきり區別されるのである。戀愛は正確な意味でここにはじめて文藝とのかかはりを持ち、それはまづ抒情詩といふジャンルの中において實を結んだのである。これを抒情詩の發生の問題の方からいへば土居光知氏が文學序說の中でいはれてゐる如く、「戀は人間の自然な情であるといふ點に於て價値を墜するものではないが、此自然を內面的にし、純粹にすることによつて初めて抒情詩の世界が展開する」（改訂版七六頁）「抒情詩を產む力は憧憬であつて欲望ではない」（七七頁）のである。その意味で萬葉の戀愛歌こそ完全な抒情詩を形成したのであるが、記紀歌謠の中にも戀愛はこのやうに抒情詩として藝術化されてゐる歌のあることが注目されるのである。

ここにいささか省みられねばならぬことは、記紀の戀愛歌のすぐれた直觀的表現の價値についてである。「文垣の　ふはやが下に　蒸被　柔が下に　沫雪の　弱やる胸を　栲綱の　白き腕　そ叩

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.